

## 解題

高丙中

生活世界

—民俗学の領域とディシプリンとしての位置付け—

NISHIMURA Mashiba  
西村 真志葉

本稿は1991年に提出された高丙中の博士学位論文『民俗文化與民俗生活』の第5章「生活世界：民俗学的領域和学科位置」の和訳であり、1994年に全編が出版されるのに先駆けて、1992年『社会科学戦線』第3期において同名の論文として発表された。

本稿に見られる民俗学への学理的な強い関心は、1988年発表の『民間口頭創作新探』ですでに鮮明に示されている。『民間口頭創作新探』は、民俗学と民間文学、あるいは民間文学と文学を包括関係で結ぶ安直な傾向を否定する立場から、プレハーノフの分類を借りて、口承資料を様式化した民間文芸（社会イデオロギー）と様式化まで至らなかった言語表現（社会心理）に細分化して理解したうえで、両者の総体を民間口頭創作と名付け、狭義の民俗学と共に Folklore を構成する有意義な一部だと主張する意欲作である。当時すでに以上のような区分は「ただ各ディシプリンに自らの明確な対象世界を所有させるためにすぎない」と冷静に考えていた高氏は、この論文により民間文学の修士号を取得したのち、北京師範大学の民俗学博士課程へ進み、引き続き民俗学というディシプリンの「明確な対象世界」の把握に取り組むことになる。

現在に至るまで、『民俗文化與民俗生活』は、中国民俗学内でもっとも影響力を持つ博士論文の一つである。その最たる理由は、この論文がはじめて「生活世界」という概念を中国民俗学に導入し、民俗学が直面するさまざまな課題、たとえば近代以降の民俗学がいかにか「民」と「俗」を確保するか、対象を共有する諸ディシプリン、とくに人類学の猛威からいかに自らの地盤を守り、存在の正当性と意義を立証するかなどの課題について、一つの答えを導いた点にある。

『民俗文化與民俗生活』は序論、総論および全6章からなる。序論において、作者は民俗学に概念や理論の体系が欠如し、独立した研究対象をも把握しきれていない現状を指摘する。概念や理論の体系がないなら構築すればよいが、独自の研究対象すら確定されていないとなれば、そもそもディシプリンとして成り立たない。民俗学の研究対象をいかに把握し、そのディシプリンたりえる基盤を作るか、そこからいかにして懐古主義的・獵奇的収集活動に終始する民俗学を、真に人間の生を見つめる有益な現代の知へと導くか、これが全編を貫く作者の問題意識であり、出された答えこそが、生活世界なのだった。

まず、作者は第2章で学史のうえから民俗の「民」と「俗」をめぐる言説を整理する。そして、時代とともに広がりを見せるこれらの概念が示す民俗学のバラエティ豊かな研究対象を一つの総体として捉えるために、第3章でサムナーの民俗研究を詳細に分析する。高氏が注目したのは生活のなかで自然に形成される「下層の、本来の、基本の」領域と専門家が構築に努める「上層の、派生の、体系の」領域という区分であり、民俗が前者に属するという示唆が、その

まま生活世界概念の導入というアイデアにつながってゆく。また、第4章ではコンテクストから抽出された「文化現象」と、今まさに実践されている活動としての「生活事実」という民俗学の異なる2つの志向性に着目し、これまで前者に偏り、現下の現実に向き合っていない過去の過去を顧みる意味でも、後者の視点から民俗学の転換が進められるべきだという認識が示された。

以上のような構成を経て、『民俗文化與民俗生活』の第5章に相当する本稿において、民俗学の研究対象は主体として生を営む人間の生活世界だと宣言された。専門的な領域からみれば、口承文芸、迷信、民芸、民間療法など異なる分野に細分化される民俗も、生活世界に生きる人々の活動のなかでは融合し、統一され、生活の動的なプロセスに通じている。この人間にとって最も根本的かつ重要な領域こそ、民俗学というディシプリン本来の領域であり、ここに他のディシプリンとは異なる独自の位置付けがなされるべきだ、と高氏は主張する。さらにこれに続く第6章では、実態が把握不可能な生活世界に替わる操作可能な概念として「民俗生活」が提示され、「民俗の主体が自らの生を民俗の定式に投入し、かつこれを形成する過程」、「民俗の現実における表出」、「人々の民俗に対する具体的な参与或いは操作」、よって民俗学の総体的な研究対象だと定義された。だが、後の中国民俗学により深い影響をもたらしたのは民俗生活ではなく、あくまで生活世界の方だった。

1990年代後半以降、とくに2000年以降、中国民俗学は生活世界という概念のもと、素朴な進化論やプロパガンダ的な階級論から脱し、その人文的なまなざしを現実の日常生活、主体として思考し行動する人間にそそぐディシプリンへと大きく転換してゆく。もちろん、この転換は『民俗文化與民俗生活』だけの力によるものではない。事実、現在の生活世界をめぐる理論的環境に当てはめてみれば、当時の高氏の生活世界に対する理解はきわめて素朴である。また、生活世界と民俗世界をイコールの関係で結ぶ論拠も、じゅうぶんに示されているとはいえない。プレハーノフのくだりも、社会イデオロギーと社会心理の区分を通じて民俗学と諸ディシプリンの共存の道を探るといふ氏の思惑に反して、やや唐突な印象が拭いきれない。高氏自身が認めるように、生活世界は中国社会科学院の呂微氏や戸曉輝氏を中心とする朋輩との議論を通じ、20年以上の時をかけて中国民俗学に浸透し、このディシプリンを動かしたのである。だが、それでも、高論文が中国民俗学の転換の起点に立つ道標となったのは疑いようがないだろう。

『民俗文化與民俗生活』の発表当時、高氏はまだ30歳にも満たない学生だった。北京師範大学を卒業後は、北京大学、イースト・ウェスト・センター、ハワイ大学、カリフォルニア大学バークレー校のポストドクターあるいは訪問研究者を経て、1999年に北京大学社会学部教授に就任し、さらに2002年にはわずか40歳で中国民俗学会の副理事に選出された。生活世界研究に精力的に取り組む高氏が、影響力を持つ学者として中国民俗学の中心にいること、これは中国民俗学内で生活世界をめぐる議論が20年以上も途切れず続いてきたこと、またこのディシプリンを動かす核心的課題にまで発展したこと、けっして無関係ではない。現在、高氏は53歳、学者として最も脂ののった年齢と言える。生活世界は、今後も中国民俗学を特徴づける概念の一つとして、引き続き研究が進められてゆくことだろう。